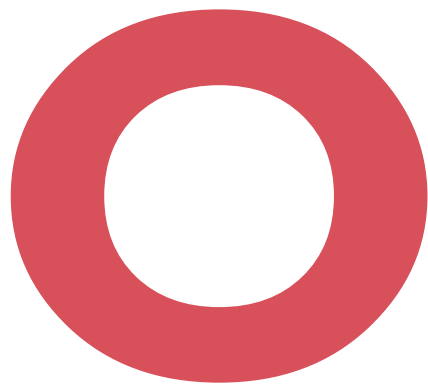




第50号 2025.9.30 発行
発行者：株式会社コロポ
編集者：JO 編集委員会

本人に帰責性のない社会的弱者 を見るとスイッチが入ります。

公益財団法人日本非営利組織評価センター事務局長

瀬上 倫弘 さん



日本NPO学会理事／NPO法人こまちぶらす 監事／NPO法人日本補助犬情報センター 監事／NPO法人エンパワメントかながわ 監事／NPO法人地球学校 監事／公益財団法人日本非営利組織評価センター 事務局長／横浜国立大学 客員研究員／東京学芸大学附属国際中等教育学校非常勤講師
民間企業にてゼネラルマネージャーを務めた後、2012年からフアンドレイジングや非営利団体の組織運営に携わり、現在は非営利組織の評価業務にも従事している。本人に帰責性のない社会的弱者のエンパワメントを自身のミッションと捉えている。徳島市出身。

社会的弱者のサポートという自分のミッションをもう一度目指してみようと思えるようになって、それから急にあちこちから声がかかるようになり、国連WFP協会に就職することになりました。

江森…そこで私もお会いすることができたわけですね。日本非営利組織評価センター（JCNE）にはどうして？

瀬上…WFP協会で10年強いろいろ経験させていただく中で、素晴らしい活動をされている他のNPOの方たちと出会うことができて、監事などに関わることが多くなってきたこともあり、もっと広くいろいろ活動に関わりたいという気持ちが強くなって転職することになりました。

江森…非営利組織専門家の瀬上さんにお聞きしますが、今改めてNPOの存在意義というか、NPOって必要なのかどうかという

うことについてどう思いますか。

瀬上…確かに変わってきていると感じますが、「NPOってオワコンなんじゃない？」みたいな話もよく聞きます。最盛期は5万団体だったのが、今は4万団体に減っていますので、データの上でも裏付けられています。では、非営利団体全体が減ったのかといえばそうではなくて、一般社団法人はすぐく増えています。私が授業を担当している高校でも、生徒がドローンを使った災害支援の一般社団を立ち上げました。学生に話を聞くと、NPOは地域課題を扱っていてボランティアベースのこじんまりした団体、一般社団はビジネスの手法を使って社会課題の解決をしていく団体というイメージがあるみたいです。

江森…その認識が正しいかどうかはさておき、若い人たちがビジネスで社会課題を解

ン関係の会社に就職しました。

江森…ワイン！？それはまた意外な！

瀬上…実はワインエキスパート資格を持ってるんですよ。社長さんから商売のコツを教わりながら結構がんばっていたのですが、ただずっと違和感というか、同僚に対して申し訳ない気持ちがずっとありました。みんなはワインのことを愛していて、利益を上げるために一生懸命働いているのですが、どうもそこに乗っかっていけない自分がいるんですよ。だんだん自分はここにはいてはいけないのではないかと、いう気持ちが強くなって後先考えずに辞めてしまいました。

江森…奥さんも子供もいるのに…（笑）。

瀬上…もうしないですねって言われました（笑）。それから半年ぐらい就職活動が思うようにいかなかったのですが、ある人に会ったことがきっかけで、本人に帰責性のない

江森…瀬上さんとは2017年にNPO・企業・行政協働で実施した寄付のイベントで一緒にさせていただいてからのお付き合いなので、そこそこ古い付き合いではあるのですが、今回対談をお願いするにあたって、そういった瀬上さんのキャリアについて全然知らなかったことに気づきました。初めてお会いしたときはWFP協会の職員さんでしたが、そこに至るまでの経緯をお願いします。

瀬上…これは今でも自分のミッションだと思っていることなのですが、本人に帰責性のないことで社会的に弱い立場に立たされている人のサポートをしたいとずっと思っていて、ですから大学では法学部に入って法曹を目指していたんです。でも最後の試験がどうしても受からなくて、家族にもこれ以上迷惑はかけられないと思って、ワイ

決するということを真剣に考え始めたということでしょうか。

瀬上…今や企業も利益追求一辺倒じゃなくなってきたですよ。ウチは安くて大量に売ればそれでいいんですなんていう企業はほぼ無いし、若い人たちもそこは見抜いているから、ビジネスで社会課題解決できるという可能性は信じているのではないかと思います。

江森…企業がビジネスで社会課題を解決するというコンセプトは、横浜型地域貢献企業認定制度を通じて、私もずっと言ってきたことなので、若い人たちがそういう認識を持つてくれることはとてもうれしいことなのですが、ではそれがスタンダードになった時代において、それでもなおNPOでなければならぬことであるんですか？

瀬上…あるんでしょうか？実際、一般社団の非営利徹底型とNPO法人を比べても、



できることというのはほぼ同じだと思うんですね。ただNPOは地域の人たちの共感を得て、活動を支援してもらっているという特長はあると思いますね。

江森…では、持続可能性についてはどうですか？

瀬上…NPOはミッション・ビジョンから始まるので、ミッションとしていた課題が社会から無くなれば解散して良いと思うのですが、例えば暴力のない社会を作ろうというビジョンを掲げたとして、そんなに簡単に実現できるものではないので、そうすると組織の持続可能性についても考えなければならぬということになります。初代のメンバーの人たちはボランティアでできたかもしれないけど、ボランティアのままでは誰が引き継いでくれるんですか？ということですよ。だからマネジメントをきちんとしてやらなければならないのですが、そもそもNPOが取り組んでいることとして、利益が出にくい分野なわけです。利益が出るならとくに企業がやっているんですよ。ですから企業と逆で、事業が拡大すればするほど、NPOは運営がきつくなるんです。そういうところも考慮して収益のバランスをとっていかねばなりません。

江森…なるほど、元の事業が赤字だから、事業が拡大すると赤字も拡大しちゃうということですね。それはつらいですね。それに関連して気になっているのは、行政の下請けに事業を受託しているNPOたくさんあるじゃないですか。自分たちのコストを下げるために都合よく使おうとする行政もいけないと思うんですけど、あの状況はどう思いますか。

瀬上…「ミッション・ドリフト」という言葉があるのですが、行政の委託を受けているうちに、だんだん自分たちのやりたかったこととずれてしまいう現象のことです。委託事業を受けると、先ほども言ったように事業が拡大して規模も大きくなり、人も増えるので、やめるにやめられなくなり、下請けが目的化してしまうというリスクはありますね。ただかつては行政とNPOは垂直的な関係でしたが、最近は行政もNPOをパートナーとして見ていると感じる場面は増えてきましたね。

江森…企業と一般社団は営利・非営利の違いはあるとはいえ、成り立ちから考えると両者はほぼ同じものですよ。それらに対してのNPO法人ということを考えたときに、もし存在意義があるのだとすれば、NPOは最初に10人集めないといけないでしょ。あれ、すごく大事なことのよう気がするんですよ。その10人がその後の意思決定に関わるとは限らないにしても、少なくとも意識はすると思うんですよ。彼らはどう思っかたてね。大企業は別として中小企業の意思決定なんて社長が決めれば決まっちゃうし、その良さというのもあるんだけど、逆に縛りが多いことが、NPOにとつてはとても意味のあることなんじゃないかと、なんとなくそんな風に思います。

瀬上…確かにNPOの方が意思決定のスピードは遅いと思います。でもより多くの人の意思を反映させるために、より多くの他者のことを考えるプロセスを経る必要があるという意味では、より民主的だし、より公共性が高いとも言えますね。

もうひとつNPOの存在意義でいえるこ

とがあるとすればアドボカシー、つまりある課題について、その課題について多くの人に知ってもらったり、解決策を提案したりする役割ということは言えるかもしれません。先ほどの江森さんのご意見は組織の内部に注目した観点ですが、社会的役割ということと考えるとそういう特長もあるかなと思いますね。

江森…それも言えますね。社会のある課題に対して、最初に光を当てる人というのか、そういう役割もとても大事ですね。

NPOが明確にそのポジションを確立することができれば、もつと寄付の受け皿になれると思うんですよ。だって寄付を自己満足でなく、社会に役立てるためにしようと思ったら、NPOが学校ぐらいしかないじゃないですか。

瀬上…NPOが本来の目的である課題解決のためのアドボカシー活動をしていくためには、寄付はとても重要な財源です。寄付の動機となるのは「共感」ですが、多くの人の共感を得るには、やはり課題を知ってもらったための活動が必要です。でもそれだけでは足りなくて、この団体なら寄付したお金をきちんと役立ててくれるという信頼を得ることもとても大事なことでと思うんですよ。JCNEでは非営利団体の評価の研究もしていると思っています。

自分に何ができるかということを考えた時に、やはり研究というのは大きなテーマで、非営利団体の実務に役立つ研究をこれからも続けていきたいと考えています。研究にあたってはユースの人たちと一緒に取り組んでいくことで、若い人たちの教育にも貢献できたらいいなと思っています。

おかげさまでJOは50号。これからの進化にご期待ください！

社名がまだ協進印刷だった頃の2012年11月に第1号を発行し、今号で50号となりました。足掛け13年にわたり当社の「いま」について多くの情報を発信できたことは、毎号楽しみにしてくださっている読者の皆様はじめ、取材にご協力くださった方々、そして執筆・編集に尽力してくれたスタッフなど、たくさんの方々の愛情の賜物と心より御礼申し上げます。

巻頭対談では「社会課題の解決に取り組んでいること」を基準として、それぞれの分野でご活躍の皆様に毎回貴重なお話を伺うことができ、私自身もこの社会を取り巻く

く実に様々な課題について知ることができました。皆さんのお話を伺って思うことは、世の中には自分は知らないけれど、何としても解決しなければならぬ困りごとが課題が実にたくさんあるということです。

近代以後、社会や技術が複雑化することによって、社会における個人の役割が専門特化し専門分野のコミュニティがたくさん出現するに至りました。それぞれのコミュニティで発生する課題は、そのコミュニティの構造やシステムに由来していますので、解決のための資源や知見がそのコミュニティ内には不足している可能性があります。

「いかなる問題も、それが発生したのと同じ次元で解決することはできない」とアインシュタインが言ったように、別の次元、すなわち別のコミュニティが持っている資源や知見が課題解決に役立つのであれば、私たちは自分の専門外の、あるいは普段交わることのないコミュニティのこともっと知る必要があるのではないのでしょうか。

JOは、私たちのミッションのひとつである「多様な主体が理解しあい支えあう公正な社会のために対話の機会を創造することを実現するための手段であったことを、いま改めて確認しています。

言うまでもなく、戦争は対話を諦めたときに始まります。混沌としたこの時代に、対話の必要性はますます高まっていると感じます。

また、メディア環境も日々変化し、人々に何かを伝える手段は一層多様になってきています。そんな時代に、もっとも対話の機会を提供できるよう、そして社会や組織のサステナビリティを支えることができるよう、JOもコラボも進化していきたいと考えています。新しいJOに是非ご期待ください。

代表取締役 江森克治

個人的な話

I ♥ GYOZA
真島愛子

世代を問わず愛される国民食「餃子」。

JO 第50号の節目に餃子ネタで良いのかと心配ではありますが、横浜で味わえる個性派餃子を3軒厳選。定番から町中華まで、その魅力を一皿ずつ追いかけます。

ちなみに、餡は「野菜多め派」と「肉多め派」に分かれるけれど、わたしは断然「野菜たっぷり派」！

①餃子専門店 横浜とんとん（保土ケ谷区・星川）



創業30年の老舗。もともとはラーメン屋さんで、餃子のおいしさが評判となり専門店へシフトしたという、まさに「餃子一本勝負」のお店。家族で営む温かい雰囲気の中でいただける餃子は、まるで実家の食卓で食べるような安心感。

餡はふわっと口の中でほどける軽やかさが魅力で、ニンニクの効いた旨味とシャキシャキ野菜が絶妙なバランス。自家製ダレと合わせれば、ご飯が止まらなくなること間違いなし。

②中華料理 徐福苑（神奈川区・大口）



お肉の旨味がしっかり主役で、野菜の甘みとバランスよく調和。皮は薄めで、焼き目は香ばしくカリッと仕上げ。にんにく控えめでランチにも◎。手包みならでは形の不揃いもまた味わい

深く、噛むたびに「手作り感」が伝わってきます。

さらに驚きなのは、餃子だけでなく他の中華メニューもハイレベル。町中華ファンなら必訪のお店。

③北海ラーメン 蝦夷（保土ケ谷区・西谷）



地元で長く親しまれてきたラーメン店ながら、実は餃子の評判も高い一軒。店仕込みの「自家製えぞギョウザ」と、気軽に楽しめる「サービス餃子」の2種類。自家製はほんのり薄めの焼き色

に、ふっくらとした包みが特徴。にらを中心とした野菜の香りと肉の旨味が調和し、食べごたえがありながらも後味は軽やか。壁一面に並ぶサイン色紙からは、多くのファンに愛されてきた人気ぶりが伝わってきます。

店名	野菜	にんにく	皮	大きさ	価格（税込）
横浜とんとん	多	多	中厚	中	¥360/5個
徐福苑	少	少	やや薄	中	¥450/6個
蝦夷	普通	少	やや薄	中	¥594/6個

餃子とひと口に言っても、お店ごとに個性はさまざま。みなさんの「推し餃子」も是非教えてください。

“じぶんだけのノートをつくらう” 夏休みイベントを開催しました

ココラボ夏休み企画、「じぶんだけのノートをつくらう」イベントを7月31日に開催しました。対象は近隣の幼児・小学生。子どもたちはプロが使っているアプリケーションを、オペレーター指導のもと操作し、世界でたった一つのオリジナルノートを作ります。毎年夏休みの時期に開催しており、今年で3回目を迎えました。新たに横浜デザイン学院の生徒さんから表紙案を募集し、16種類の幅広いデザインから表紙を選択できるようになりました。参加人数は56名で過去最高の賑わいになり、ココラボファクトリーが子どもたちの元気な声であふれ、私たちも豊かな時間を過ごすことができました。



インターンシップ受入 10年間で延べ80名

当社では、次世代を担う若い人材の育成を目的に、10年以上にわたるインターンシップの受入を続けてまいりました。これまでに受け入れた学生は延べ80名を超え、中学生の職業

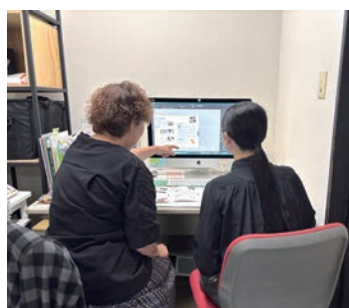
体験も含めると百名を超える子どもや学生が当社を訪れています。

今夏も、台湾国際人材センター（TTC）のインターン生および国内大学生あわせて5名の学生を受け入れました。大学生の研修は5日間と短期間ですが、1年生は3週間にわたり社会課題解決をテーマにした企画立案に取り組んでいます。

今年の研修生の陳立恩さんは「高齢化社会」に着目し、高齢の方々が安心して台湾旅行を楽しめるようにと、台湾旅行のためのガイドブックを制作しました。指差しカードによるコミュニケーション支援に加え、バリアフリーに対応した観光地や施設の情報をまとめ、自身の手描きイラストを添え温かみのある、高齢者にやさしい一冊に仕上がりました。

10年間で振り返ると、私たちも学生たちとの交流から多くの気づきと学びを得てきました。当社のインターンシップは採用目的ではなく、地域社会への貢献活動の一環として実施しています。これからも教育

機関と連携し、社会のお役に立てる取り組みを継続してまいります。



紙製クリアファイルが「カーボンオフセット付き」になりました。

脱プラスチック、リサイクルの促進による廃棄物削減に貢献する環境配慮型ノベルティとして多くのお客様にご支持いただいている紙製クリアファイルが、この度カーボンオフセット付きになりました。追加料金は一切かららず、今までと同じ価格でCO₂の排出削減にも貢献できます。

カーボンオフセットとは、製品製造などで発生してしまうCO₂を、例えば森林などの場所での削減や吸収で埋め合わせる枠組みのことで、排出分のクレジットを購入することで実現することができます。

当社では製造工程においてはCO₂は排出されませんが用紙やファイル加工、運送などで排出される相当分のクレジットを購入して埋め合わせすることになります。カーボンオフセットを実施するにあたっては、紙製クリアファイルの製造工程に関わるサプライチェーン排出の全量相当を算定し、排出量が実質ゼロになるようオフセットしています。またご希望の場合は有償にて、オフセット実績を証明する独自の証明書の発行も承っています。

専門的な情報も含みますので、詳細についてはぜひお問い合わせください。無料のサンプルもご用意しています。

▼ホームページはこちら



▼さらに詳細は説明はこちら



JO（ジェイ・オー）2025年9月号（第50号）
発行者：株式会社ココラボ
横浜市神奈川区大口仲町108番地
TEL：045（431）6611
FAX：050（3730）6273
URL：<https://www.cocollabo.jp>

